34

# 『脈経』二十四脈状の構造分析

## ――遅数と疎疾の相違点

中川俊之

脈診は中国医学において最も重要な診察法である。脈診には様々な方法があるが、大きく二種類に分けられる。一つは複数の脈診部位の差異を診る比較脈診であり、もう一つは特定の脈診部位に搏つ脈の状態を診る脈状診である。このうち、脈状診が特に重要である。歴代医書は概ね脈状診の記載で占められているからである。中国医学の脈診を考えるには、脈状診を抜きにする事は出来ず、その要素である脈状の解析が必要である。

今回の検討材料である『脈経』は脈診の原典とされている。『脈経』は今から一七〇〇年程前の西晋の成立とされ、それ以前の主要医書を引用して書かれた脈診中心の医書である。その脈診に関する内容が後代に様々な変型を生みつつも、今日まで脈診の大きな規範となってきたからである。今の中国医学に繋がる中国宋代以降の医学や日本近世の医学で、脈診が問題とされる時は多く『脈経』が判断基準となった。後代の脈状研究は、新たな脈状の発見では無く『脈経』の記載の解釈が中心だったのである。

後代の脈状研究で特に研究対象とされたのは、『脈経』巻一冒頭に見える二十四脈状であった。この二十四脈状という纏まった記載は『脈経』以前の医書には見られない。『脈経』の巻一冒頭に突然、完成された形で現れるのである。これは脈を二十四脈で全て説明しようという試みであったと思われる。ここで二十四脈状の価値は個々の脈状ではなく、脈状を分類した事に見出される。この脈状を分類する方法は踏襲され、後代においても脈は分類される事で理解されるのである。二十四脈状、とりわけその分類法の解析は脈状の構造を知るうえで不可欠のものである。

二十四脈状の構造を理解するには、二十四脈状各々の脈状、脈證の解析とその相互関係を知る作業を行うのは勿論のことであるが、『脈経』に記載されながら二十四脈

状に採用されなかった脈状と二十四脈状との関係を調査する事も有益な作業である。『脈経』は先程述べた通り、それまでの医書を基に編纂された。拠った医書は主要なものだけでも『素問』『霊枢』『難経』『傷寒論』『金匱要略』があり、それ以外の現在『脈経』にしか見えない文章も亡佚医書によったとされている。つまり複数の医書の様々な思考を寄せ集めた医書なのである。よって個々の文章は必ずしも一貫性を保っていない。脈状の記載についても同様であり、同じ概念を違う名称の脈で表現したり、同じ脈でも表す内容が違う場合が見られる。二十四脈状はそれらの脈状記載を一つの枠組みで捉える目的で発明されたと考えられるが、その発明の過程で採用されなかった脈状がいくつも存在する事となった。同じ概念を表す脈状が、二十四脈状に組み込まれた脈状と、切り捨てられた脈状に分かれたのである。採用不採用に分かれた理由を探る事も二十四脈状の理解において、決して意味の無い作業ではないだろう。

今回はそれらの内、遅脈、数脈と疎脈、疾脈について検討を加える。これらは速いか遅いか、つまり一呼吸に何回脈が搏つかで分類される脈状である。二十四脈状の中では、遅脈、数脈が脈の速さを表す脈状として登場するが、『脈経』中では必ずしも遅数とはなっていない。数脈と対となる脈として遅脈ではなく疎と表現される場合と、遅脈と対する脈として数脈ではなく疾と表現される記載も散見するのである。遅脈、数脈と疎脈、疾脈各々の意味、遅数と遅疾、疎数として表される内容の相違点を明らかにしたい。これらの違いが解れば、様々な脈状記載の中における二十四脈状の位置がより明確になるだろう。

（日本鍼灸研究会）